

近畿大学中央図書館蔵

奈良絵本絵巻『さざれ石』・『松竹物語』復元試案（下）

高木浩明・大角ひかる・角地夏葉・

木下桜典・阪口俊弥・成尾信明・

藤本将太・松尾遼

一

前号（35―1号）に続き、近畿大学中央図書館に所蔵される二巻の奈良絵本絵巻の紹介を行う。

絵巻を収める塗箱（三七・四×一六・八糎）には、銀色の筆で、上部に「鶴かめ／松たけ」、下部に「二巻」と記されているが、「鶴かめ」とある方は、『鶴亀物語』と同類の御伽草子の『さざれ石』である。現在は『鶴亀物語』と『さざれ石』を別作品として扱うが、他に国立国会図書館にも近大本と同じ組み合わせの「鶴亀松竹物語」と題する二巻の絵巻（請求記号、ん―一七四）が伝来していることから、製作

当初は、『鶴亀物語』と『さざれ石』に明確な区分はなく、「鶴亀物語」として認識されていたのかもしれない。

本絵巻については、図書館のホームページの「近畿大学貴重資料デジタルアーカイブ」に画像が公開されているので、誰でもアクセスして見ることができ、公開されている画像にたどりつくのが少々難しいかもしれない。画像を見る場合は、図書館のホームページ上にある「貴重書・コレクション」のバナーをまずはクリックして、「近畿大学貴重資料デジタルアーカイブ」、「#カテゴリ／貴重資料」、「▼和書」という具合に進むか、ホームページ下部の「貴重書・コレクション」、「近畿大学貴重資料デジタルアーカイブ」をクリック

クして、検索項目に「さざれ石」もしくは「松竹物語」と入力すれば画像を見ることができると判明した。

二〇二二年度、私（高木浩明）が担当する「書誌学2」の授業において、この絵巻について徹底的に調べた後に、原本を閲覧するという体験授業を行ったが、授業で学部生とともに本絵巻を読み始めた早々、絵巻の詞書（本文）と絵に錯簡（前後が入れ違って乱れている）があることが判明した。

授業内容は当初の予定を大幅に変更し、学生と共に、この絵巻の本来あるべき姿の復元をめざすこととなった。そのため、学生らと関連する資料の収集をし、さらに同様の絵巻を所蔵する機関や大学のホームページなどで公開されている画像を参考に、復元を試みた。

錯簡が生じる原因は様々あるが、今回のように複数の料紙が貼り合わされて作成される絵巻の場合には、ある時期に行われた修理の際に、誤って順番が前後してしまったということが考えられる。

修理の際、一枚ごとに剥がした料紙には、修理後に再度貼り合わせる際に順番が乱れないように、番号か符丁かを付けておくものだと思うが、現状では本絵巻にその痕跡を確認することはできない。錯簡は起こるべくして起こったとも言えるが、あまりにもお粗末である。さらに本絵巻の錯簡は、同

じ絵巻の中だけで起こっているだけでなく、絵については二巻の絵巻間で相互に入れ替わっていることが判明した。ここでは、絵巻を広げて順番に物語を読む事はできない。

以下は、「書誌学2」の受講生と共に行った絵巻の復元を、試案として示したものである。一部の絵については判断を保留しているものも含まれているが、最終的に適当と思われる箇所を示すこととした。これらについては、識者のご教示をお願いしたいと考えている。

本稿は、前号（35―1号）で考察を行った『さざれ石』に続き、もう一つの奈良絵本絵巻『松竹物語』についての復元案と本文の翻刻を示すこととする。

二

『松竹物語』は、『さざれ石』（『鶴亀物語』）同様、不老長寿を祝う祝儀物の一種で、養老の滝伝説や、松竹の伝説の要素を含んでいる。諸本によって細部に違いはあるものの、この二つを合わせて「鶴亀松竹物語」と呼称し、伝来している。話の要点は以下の通りである。

懿徳^{いとく}天皇の御代、日向国岩根山の麓に、粗末な庵を結んで暮らす夫婦がいた。山に入って木の実を拾ったり、谷から流

れ出る水を飲んで暮らしていた。人里にも近かったせいか、山に薪を取りに入る者や、木の実を拾う女、蕨を取る翁、草を刈る者などがいたが、夫婦のことを詳しく知る者は誰もいなかった。

ある時、山に薪を取るために入っていた三人の翁が、里に帰ろうと山を下っているうちに日が暮れたので、夫婦が暮らす庵の傍らに、薪を下ろして休んでいた。夫婦と三人の翁は、互いに顔をよく知る仲でもあったので、どちらからともなく話をした。

一人の翁が言うことには、「私は幼い頃、祖父と共にこの山に入り、この庵に住むあなたにお目にかかったことがあります。祖父も親も百歳ほどで亡くなり、私も御覽の通りの白髪の翁になりました。しかし、あなた方はその頃と変わらず若いお姿のままです。いったいどうしてなのでしょう。あなた方はいったいお幾つになられるのでしょうか」。

問われた庵の主人は、「私たちは神代よりこの場所に住んでいます。歳は千歳になるでしょう」と答え、葦原国（日本）の起源や日向国について語るとともに、「この地の谷に流れる水には甘露が流れているので、この水を飲む者は不老不死となる。そういうわけで私たちもこのように若い姿のままにいますのだ。あなた方も朝夕この谷の水を飲めば、私たち

同様、若い姿になるだろう」と言った。その話を聞いた三人の翁は、谷へと下りて水を飲んだ。するとたちまち壮健な若者の姿となった。それはこの水を飲んだ祖父や親、兄弟、親類縁者たちにも及んだ。

この水を帝にも献上しようと上京したその土地の者から話を聞いた帝は、すぐに件の場所に行幸する意向を示すが、日向国は都からあまりにも遠い場所である。臣下の意見を聞いて夫婦を都へと呼び寄せ、話を聞いた。帝は居ても立っても居られずに、自らその場所に行つて御覧になりたいと、岩根山の麓に暮らす夫婦のもとへと行幸し、夫婦に谷川へと案内させ、そこで水を飲むと、たちまち若い姿になった。帝は夫婦にほうびの「たから物」を与え、一年に一度「かんろ（甘露）の水」を汲んで上京するように命じ、都へと帰って行つたが、度々勅使を日向国へと派遣し、夫婦は甘露の水を献上した。これを飲んだ帝は、若返り、長生を保った。

数年後、長生を保った夫婦は、行方知れずとなった。里人は夫婦の行方を捜したが、見つからなかった。夫婦が暮らした庵の傍らには、一晚の内に松と竹が一本ずつ生えた。これを見た里人は、夫婦が松と竹に身を変じたのだと噂した。一方、都にいる帝の夢に夫婦が現れ、未来永劫帝をお守り申し上げると言つて、

いはね山いはねにおふる松竹のおひそふまゝにすゑ久し
かれ

という一首の歌を詠んで、姿を消した。

帝は、勅使を日向国岩根山の麓へと派遣し、神社を建て、松と竹に身を変じた夫婦を岩根の宮として祀った。長寿を願う者は、この神社に参れば必ず皆長生きをしたという。今の世に至るまでめでたい例として松と竹を祝うのは、この時に始まる。

三

【書誌】

松竹物語

〔形態〕 絵巻、一軸。

〔分類〕 御伽草子

〔表紙〕 山吹色入子菱文地唐草散らし表紙。三一・四×二六・五糎。見返し金箔。

〔外題〕 無。

〔内題〕 無。

〔尾題〕 無。

〔紙数〕 二四紙（うち、絵六図）。第一紙（詞1―1）、

五一・五糎、第二紙（詞1―2）、二五・二糎、第三紙

（絵1）、九二・三糎、第四紙（詞2―1）、五一・八

糎、第五紙（詞2―2）、二五・五糎、第六紙（絵

2）、五二・〇糎、第七紙（詞3―1）、五〇・四糎、

第八紙（詞3―2）、二五・一糎、第九紙（絵3）、

五二・四糎、第一〇紙（詞4―1）、五一・〇糎、第

一一紙（詞4―2）、二三・九糎、第二二紙（詞4―

3）、五〇・七糎、第一三紙（詞4―4）、五一・六糎、

第一四紙（詞4―5）、五一・六糎、第一五紙（絵

4）、五〇・六糎、第一六紙（詞5―1）、五〇・五糎、

第一七紙（詞5―2）、五二・二糎、第一八紙（詞5

―3）、五二・一糎、第一九紙（詞5―4）、五一・一

糎、第二〇紙（絵5）、五二・三糎、第二一紙（詞6

―1）、五一・〇糎、第二二紙（詞6―2）、五一・九

糎、第二三紙（詞6―3）、二五・三糎、第二四紙

（絵6）、九一・三糎。合計、一一八四・三糎。他、後

余白九・八糎。

〔字高〕 二六・一糎。

〔料紙〕 斐紙。本文の料紙には、秋草等の金泥下絵あり。

〔奥書〕 無。

〔備考〕 錯簡の他、本文に一部衍字や誤脱等がある。

【翻刻】

凡例

一、原本通りに翻刻し、改行も原本のままとしたが、本文の傍には、本絵巻の明らかな誤脱を○に入れて記した他、多くは学生が本文を読む際の参考として、適宜漢字を宛て、○内に記するとともに、句読点を施した。

一、本絵巻には大きな錯簡があるが、現状を知るため、あえて現在の順番通りに翻刻、その都度、本来のあるべき位置を記した。

(第一紙・詞1-1)

この秋つしまに、みかと、はしまら
 せ給ひて、すてに四代にあたらせ
 給ふをは、いとくてん皇とそ申
 たてまつる。御いつくしみふかく、たみ
 を(なく)あはれみ、御めくみあまねく、
 世をおさめたまふゆへに、くに
 ゆたかに、万民のうれへもなく、
 四方のうみ、なみしつかなれは、とを
 きさかひより、御たから物をそなへ、
 せきの戸さしも、すなほにして

さ、されは、くにくより、みつきも
 のをはこひて、きみをうやまひ、
 たつとみたてまつる事、まことに
 君臣ともにおたやかなりし御代
 なりけり。されは、てん地もかんおう(一紙)

(第二紙・詞1-2)

をなし侍るゆへにや、かんろをくた
 して、おほきみの御よはひをのへ、く
 すりのみつをわかつて、人みんのいの
 ちをやしなひつ、めてたき
 ためしとも
 おほかり
 けり。(二紙)

(第三紙・絵1)

ここに入っている絵は、『さざれ石』の第三紙(絵1)に入
 るべきものか。本来は、『さざれ石』の第一八紙(絵5)
 に入っている絵(懿徳天皇のもとに諸国から続々と献上品が
 届く場面)が入るのが正しい。

（第四紙・詞2-1）

つくし（筑紫）ひうかのくに（日向）、いはね山といふと（所）
 ころに、とし（年）しきふうふ（夫婦）のため
 あり。さんりん（山林）にあやし（いほり）のいほりをむ
 すひ（山）、やま（山）に入（木）て、このみ（美）をひろひ（谷）、たに
 にくたりて、みつむすひ（水）なとして、
 世をわたるものなりけり。さすかに人（里）
 さとちかきあたりなれば、たき木をこる
 山かつ（賤）、このみ（美）をひろふしつ（安）のめ、わらひ
 をほる（翁）おきな（翁）、草かるを（男）のこにいたる
 まて、あさゆ（朝夕）ふみなれ、したしめり。され
 とも、このふうふ（夫婦）は、いつの世にむまれ
 たりと、さたかにしれるものなし。又は、
 いくよりこ、にきたれりともしらす。
 むまれところもなければ、ましておや（親）
 もなし。されは、天よりや、ふりぬらん、地
 よりや、わきぬらん、山神（木童）、こたま（木童）などの
（変化）へんけしてけるにや、ところ（木童）にすみかよふ
 てみなれける。おとこ（男）、女、おほち、おやこ、
 まこ、ひまこ、やしはこと、したい（夫）い（婦）に代
 かはり（年）、としつ（夫）もれとも、かのふうふ（夫婦）はいつ

も少年のすかた（婆）にして、うれへ、かなし」（四紙）

（第五紙・詞2-2）

むけしきもなく、たのしみ、よろこぶ
 よそほひにて、月日を、くりけり。ま
 ことにいとあやしき事なりけり。ある
（新字）（ある）とき、たき木をとれるおきな（翁）
 三人、山よりさ（里）とにかへるとて、日くれ
 ければ、かのふうふ（夫婦）のいほり（庵）のかたはらに、
 たき木をおろしてやすみ
 あたり。」（五紙）

（第六紙・絵2）

日向国岩根山の麓に、粗末な庵を結んで暮らす夫婦がい
 た。人里にも近かったせいか、山に薪を取りに入る者や、木
 の実を拾う女、蕨を取る翁、草を刈る者などがいたが、夫婦
 のことを詳しく知る者は誰もいなかった。

（第七紙・詞3-1）

以下、錯簡あり。本来、第六紙（絵2）の後には、現在の
 第一六・一七・一八・一九・二〇紙（絵3）が入る。

かのこんろんさんといふやまは、玉の
 しやうする山なり。そのやまへいし、か
 はらをなくれば、時のまにへんして、
 玉となれるかごとくに、このみつを
 のめるおきな、しらか、たちまちにへん
 して、くろかみのわらはとなるこそふ
 しきなれ。されは、いはね山のちかき
 あたりのさとくは、おとこも女もみな
 ちやうせいをもつ事、この水をあさ
 ゆふくめるゆへなるへし。つちも木も、
 わか大君のくになれは、これすなはち、
 きみの御たからのみつなり。しかるを、い
 やしきたみのわたくしとして、もち
 ゐん事、てんのかめ、おそろしく、すみ
 やかにそうもん申へしとて、そのところ
 のおとなとも、宮こにのほりて、この
 よしをかくと申して、くたんのみつを
 君にさ、けたてまつる。みかと、きこし
 めして、ゑいかなのめならず、かほとに
 めてたきれいちを御らんせさらんも、
 むけにくちおしからん、いそきみゆき」(七紙)

(第八紙・詞3―2)

なるへしとの給ふ。大臣たち、是はせん
 しにて候へとも、天子万せうのやん
 ことなき御身として、たやすく御駕
 をめくらされ、万里のはたうをしの
 かせ給はん事、いか、候へからん。只ちよくし
 を立て、かのふうふをめされて、みそなはし、
 かの水をは、御心にまかせてはこひ
 とりきこしめさるへし。さあらは、なとか
 御ちやうせいをたもち給はさらんやとぞ、
 そうせられける。」(八紙)

(第九紙・絵4)

この水を帝にも献上しようと上京したその土地の者から話
 を聞いた帝は、すぐに件の場所に行幸する意向を示すが、日
 向国は都からあまりにも遠い場所である。臣下の意見を聞いて
 夫婦を都へと呼び寄せ、話を聞いた。

(第一〇紙・詞4―1)

されともみかとは、かのくにはもとより、
 人わうのむまれ給ふくになれは、

神代のそのかみもゆかしくおほし
 めされければ、みつからかしこにみゆき
 まし／＼て、ゑいらんありたくおほし
 めせは、かたしけなくも、みかとはる／＼
 と御下幸まし／＼けり。すなはち、
 つくしひうかのくに、いはね山にみ
 ゆきなりければ、かのふうふの人／＼
 は、おほきによるこひ、かしこまりて、
 いほりのうち（内）のちりうち（塵）はらひ、こけ
 のむしろ（庭）をきよめて、きよく座をかま
 へつ、みか（帝）とをすゑたてまつりけり。
 御まへには木（妻）のみ、かや（妻）のみ、めつらしき
 物ともをそなへ侍りぬ。みか（帝）とのおほ
 せには、ふうふ（夫婦）もろともに、よは（齢）ひを
 久しくのへしゆらい（由来）をくはしくそ
 うすへしとのたまへは、ふうふ（夫婦）、こたへて
 まうさく、われらは神代（所）よりこのとこ
 ろに侍るなり。しやうこ（上古）には、このくに
 に五（殺）こくのたく（類）ひもさふらはす。をの（国）」（二〇紙）

（第一二紙・詞4―2）

つから山（本）のこのみ（実）をしよくし、
 た（谷）にのみ（水）つを
 のみて
（年）とし月を
 くらし候と
 申す。」（二一紙）

※本来、第一一紙と第一二紙の間には、現在、『さざれ石』
 の第八紙に入っている絵（絵5、夫婦の話聞いた帝は、
 自ら日向国の岩根山の麓に暮らす夫婦のもとへと行幸し
 た）が入る。

（第一二紙・詞4―3）

さてそのこのみ（本）、水（妻）のあちはひ、世に
 こえてめてたき事侍りやと、のた
 まふに、さしてかはれる気味ありと
 もおほえ侍らす。むかし、この山へ、天
 よりかんろ（甘露）ふりくたる。そのあとに、く
 こと申草生（也）したり。その草おほき
 にはひこりて、はやし（林）となれり。その

はやし(林)のつゆのしたゝり、たに(谷)、なかれて、をのつからくすりの水となり侍るなり。されは、いま(今)の世にもてん(天)よりかんろ(甘露)ふるとみえて、かのたに(谷)のみつ(水)、あまく侍る事、おり(水)く(水)に侍るなりと申す。さらは、かのたに(谷)に川を(叔覧)ゑいらんあるへしとて、ふうふ(夫婦)のものを(先)さきにたて、みゆきありけり。ゐんりん(隠論)たるくこのはやし(林)をわけゆきて、いはのかとをか、へておりたまへは、たに(谷)の水をと、たう(音)くた(夫婦)り。ふうふ(夫婦)、みつをむすひてこ、ろみ申やう、けふ(今日)も天よりかんろ(甘露)のくたりけるにや、このみつ(水)、れい(例)ならぬあち(一二紙)」

(第一三紙・詞4―4)

はひに侍と申す。みか(帝)と、あやしくおほしめし、むすひあけてきこしめすに、けにもあちはひ、よのつねならず。天のかんろ(甘露)のあちはひ、これやらん。御(心)こ、ろもはれやかに、御身も

かるく、たちまちに、わかやかせ給ひけり。みか(帝)とのおほせには、このくに(国)はしまりてのち、草木の物いふことありといひし。神の御代にもかほと(不思議)のふしきありといふことをはきかす。もろこし(唐土)はひろきくに(国)て、しかもひさしき世をすくしきたりといへは、さこそはかやう(不思議)のふしきもありつらめとのたまへは、ふうふ(夫婦)、うけ給はりて、もろこし(唐土)にしとうと申せん人は、なんやうけん(水)のきくよりしたゝる、たに(谷)みつをのみてこそ、ちやうせい(不老)いらうのせん(仙)しゆつ(術)をは、たもち侍る也。又このくこ(枸杞)を(食)しよくして、よはひ(齢)を(進)へたるゆ(故)へも侍るによりて、くこ(枸杞)をは、せん人ちやうともなつけ侍るなりと申す。みか(帝)とのたまはく、なんちらは、」(一二三紙)

(第一四紙・詞4―5)

た、人ならねは、なに事もよくそらにおほえたるらん。いにしへの事こ

そゆかしけれ。くはしくそ^(奏)うせよかし
との給へは、ふう^(夫婦)ふうけたまはりて、
千はやふる神の御代はすなほに

して、ことのこゝろわきかたく、これそ
とさしてそ^(奏)うすへき事も侍らす。

しんむ^(神武天皇)天王、うとのいは^(鶴戸)やにての御
たん^(誕生)しやうよりこのかた、みや^(宮崎)ささき

のこほりにて、はしめてあまつ日^(天)つ
きのくら^(位)らゐにつかせ給ふ。御事などは

このくに^(国)、て候へは、まのあたりに
みたてまつりぬ。その、ち、たうこく

に五十九年おはしまして、とう^(東征)せい
し給ひつ、あし^(華原)はらなかつくに、と、

まり、うねひ山、かしははらの宮^(奏)こを
はしめ給ふ事などを、くはしくそ^(奏)

し侍れは、みか^(帝)と、かしこくかんし給ひ
て、いろく^(宝)のたから物^(夫婦)をふうふに

給ける。今は宮^(甘露)こにかへり給ふへし。なん
ちらは、としく^(甘露)にかんろの水をくみて、

宮こへ奉れとその給ひける。」(一四紙)

(第一五紙・絵6)

帝は夫婦に先導させて、谷川へと行幸する。

(第一六紙・詞5—1)

錯簡あり。第一六紙から二〇紙(絵3)までは、本来、第
六紙(絵2)の後に入る。

ふう^(夫婦)ふの人くも、としころみなれし

ことなれは、たかひにむつましくも^(物語)のか
たりしけり。一人のおきな申やう、そ

れかし、わらは^(童)のとき、おほちと^(祖父)、もに、
やまに^(山)いりし日より、このいほりのある^(庵)
しをは、みしりて侍り。その、ちおほく^(主)

のとし月をかさね侍れは、おほちも^(年)
おやも、百とせあまりにてうせぬ。そ^(祖父)

れかし、又かやうにはくはつたるおきな^(親)
となれり。しかるに、あるしふうふのす^(白髪)
かたをみ侍れは、われおさなきとき、^(夫婦)

見侍しかた^(時)にことならず。いかにし
てかくめてたきありさまに侍るそ^(有様)

やと申せは、一人のおきな申やう、われ^(我)

もとしころゆかしくおもひし事なり。
 かしこくもふしんし給ふものかな。さ
 てく(夫)ふうふの人く(の)の、とし(は)はいくつ
 にかなり給ふそと、とへは、ある(主)しうち
 うなつき、われらは(我)、神のみよ(御代)りこの
 ところにすむなり。とし(は)は千さいにも
 あまりぬらんと、こたへけり。むかしはこの(一六紙)

(第一七紙・詞5-2)

く(国)に、こよみ(暦)といふものもなかりしかは、
 木のめくみ、花さき(夏)、みなり(実)、はのおつる
 を見て、春な(冬)つ秋ふゆ(冬)のうつりかはる
 をしりて、ひと(一)と、せ(年)をしるなるへし。ほ
 のかにきく、よもき(蓬)かしま(鳥)にすめる人、
 ふう(不老不死)うふ(薬)しのくすりをふくするゆへ(服)
 に千とせ(歳)のよはひ(齢)をのふといへり。こ
 のあき(秋)つしま(津島)には、千はやふる神代
 にこそ、あるひは八万さい(歳)、あるひは九千
 さい(歳)など、よはひ(齢)をたまちしかとも、人
 の世となりては、さたにもをよはす、や
 うやく百さい(歳)にあまるのみなりけり。

しかるに、このある(主)しにかきりて、ちと(千歳)
 せのよはひ(齢)をたまち給ひ、そのうへ、い
 つもかはらぬ御すかた(婆)におはしますこそ、
 めてたけれど、うらやみ侍りぬれば、ある(主)
 しのいはく、このあし(華原)はらくくと申は、
 神のうみ出し給ひ(国)しくになれば、いつ
 れのく(国)によりもめてた(国)きくになり。そ
 れに又、このひうか(日向)のく(国)にと申は、あめ(天)
 みこと、あまくたらせ給ふれ(霊地)いちなり。天
 みこと、申は、あまてるおほん神(天神)の御(一七紙)
 まこのみことなり。たかちほ(高千穂)のくしふる

(第一八紙・詞5-3)

のたけと申は、みこと(尊)のくたり給ふと
 ころなり。その(後)ち、三代の御神、この
 く(国)に、すみ給ふゆへ(放)に、かのみさ(歳)き
 もこのく(国)に、あり。か、るたつときれい(霊)
 ちなれば、天人もやうかうし、地(地)しんも
 しゆこす。されはとしく(甘露)かんろふりく
 たりて、く(国)にをきよむ。そのうるほひ、
 草木(善)のはにと、まり、さうもく(木)のし(滴)

つくたに、くたる。そのみつをのむ
 ものは、をのつからくすりの水となり
 てよはひわかやき、としひさしく、さ
 かんなるへし。これなるくこのはやし
 には、かんろふりくたれるゆへに、そのし
 た、りをうけてのみ、又そのしつ
 のなかれたにみつをのみ侍るゆへ
 にかくのこくちやうせいをたもつや。
 なんちちちもちやうせいをたもたん
 と思は、あさゆふにこのたにの水を
 くみて、のみ給へ。かならすそのきとく
 あるへしといふ。このおきなら、おほき
 によるこひ、すなはちをしへにまかせ」（二八紙）

（第一九紙・詞5―4）

て、かのたに、くたりつ、水をくみて
 のみけるか、けにもそのあちはひいさ
 きよく、よのつねにはことなり、てんの
 かんろといふものは、これなるらんと、しん
 くきもにめいして、よろこひたつと
 むほとに、三人のおきなは、白はつ

すかた、たちまちにへんして、うるはし
 く、さかんなるかたちとなるこそ、あや
 しけれ。たかひにかほとくをみあはせ
 つ、よろこふ事かきりなし。さらは此
 みつを、むつまじきものともにあたへ
 むとて、あるひは、おや、おほち、

あるひは、きやうたい
 しんるいに

のませけ

れは、

おなしくその身

みなわかや

きけり。（一九紙）

（第二〇紙・絵3）

ある時、日向国岩根山に薪を取るために入っていた三人の
 翁が、里に帰ろうと山を下っているうちに日が暮れたので、
 麓に暮らす夫婦の庵の傍らに薪を下ろして休んでいた。庵の
 主から、「この山の谷を流れる水には甘露が流れているので、
 この水を飲む者は不老不死となる。そういうわけで私たちが
 このように若い姿のままにいるのだ。あなた方も朝夕この谷

の水を飲めば、私たち同様、若い姿になるだろう」という話を聞いた三人の翁は、谷へと下りて水を飲んだ。するとたちまち壮健な若者の姿となった。

(第二紙・詞6―1)

その、ちは、たひく(勅使)ちよ(水)くたし給へは、ふうふ(夫婦)、かんろ(甘露)のみつをむすひをきて、たてまつれり。み(帝)かと、このみつをきこしめしけるゆへ(故)に、御よ(勅)はひ、わか(長生)く、うるはしくなり給て、ちやうせい(長生)をたもち給ふ事、いく久しかりけり。その、ち、おほくの年月をへて、かのふうふ(夫婦)の人く(行)、ゆく(方)かたしらすうせ給ひけり。里人とも、あやしみをなして、こ、かしこたつぬれとも、つゐにあひえず。くたんのいほ(件)りのかたはらに、一夜のうちに、松と竹と一本つゝおひいてたり。人く(鹿)あつまり、これを見て、かゝるいはほ(鹿)のかたはらに、にはかに松竹のしやうすへきやうやあるへき。是はいかさま

かのふうふ(夫婦)の人く(変化)のへんけし給ふなるへしとて、をのく(境)かつかうし手をあはせておかみけり。さて又、みやこには、みか(帝)との御ゆめに、かのふうふ(夫婦)のもの、まみえたてまつり、この「(二二紙)

(第二二紙・詞6―2)

し(娑婆世界)やはせかいと申は、ゑ(穢土)とのさかひなれば、つゐにはなからへはつへからす。いまよりはとこしなへに、みか(帝)とをまもりたてまつらんとために、神とけん(現)し侍る也とて、一しゆ(首)の哥に、いはね山いはねにおふる松竹の おひそふま(末)ゝにすゑ久しかれと詠して、かきけすやうにうせにけり。御夢さめてのち、あやしくおほしめし、やかてかのくに(国)、ちよくし(勅使)をぞ立られける。あたりの里人と、ちよくし(勅使)の御けかう(下向)をまちえつ(事)、こと(事)の次第をくはしく申せは、さてはうたかふところなし。この松と竹と

こそは、かの二人の神（体）たいなりけれど、
 ちよくしも（勅使）かつかうし給へり。され
 は、十八こうの栄は、霜ののちに
 あらはるとて、松は君子のとくをし
 めし、霜雪にもいろをへんせず。
 千年のみとりは、（緑）ときはなり。竹又
 その色、松にひとしうし、しかも霜
 にもおか（ま）・れす。よはひ久しきもの也。」（二二紙）

（第二三紙・詞6―3）

すなはち、そのと（所）ころにやしろをた
 て、あけの玉かきをゆひて、（夫婦）ふうふを
 神にいはひたてまつられけり。いは
 ねのみやと申は、これなり。されは、（言）しゆ
（命）みやうをねかふ人は、このやしろに
 まうて、いのは、そのくは（願）んたち
 まちかなひて、ちやう（長）せいをたまち
 けり。いまの代にいたるまで、めて
 たきために松竹をいはふこと
 は、この時よりそ、はしまれるとかや。」（二三紙）

（第二四紙・絵7）

帝は、勅使を日向国岩根山の麓へと派遣し、神社を建て、
 松と竹に身を変じた夫婦を岩根の宮として祀った。長寿を願
 う者は、この神社に参れば必ず皆長生きをしたという。

【付記】

本稿は、はじめにも記したように、二〇二二年度、近畿大
 学文学部において実施した「書誌学2」の授業成果をもと
 に論文化したものである。近畿大学中央図書館に所蔵される
 二種の奈良絵本絵巻に見られる錯簡の復元を、本授業の担当
 者である高木浩明の指導のもと、本授業を受講した学部生
 が、原本の調査、関係論文の収集と分析、積極的な意見交
 換、レポートの作成を経て試案として提出するものである。
 論文の執筆は、高木が行い、その責任も全て高木にあるが、
 成果そのものは、受講生の積極的な参加と意見交換があつて
 可能になったものであることから、以下の受講生を共著者に
 加え、敬意を表するとともに、学会に向けてその成果を発表
 することとした。（五十音順、所属は当時）

大角ひかる 文学科日本文学専攻創作・評論コース
 角地夏葉 文学科日本文学専攻言語・文学コース

木下桜典
阪口俊弥
成尾信明
藤本将太
松尾遼

文学科日本文学専攻言語・文学コース
文学科日本文学専攻創作・評論コース
文学科日本文学専攻言語・文学コース
文学科日本文学専攻言語・文学コース
文化・歴史学科



図版1 『松竹物語』003・004・005 (絵1)



『ざざれ石』023・024 (絵5)



図版2 『松竹物語』007（絵2）



図版3 『松竹物語』 022 (絵3)



図版4 『松竹物語』010（絵4）



図版5 『さざれ石』 011・012 (絵5)



図版6 『松竹物語』 016 (絵6)



図版7 「松竹物語」 025・026・027 (絵7)